

得た。そのことが複数回の肝臓治療を可能にした一因と考えられた。

18. 生検にて高分化型と診断された単発肝細胞癌の予後

千葉哲博, 篠崎正美, 菊池保治
村岡秀樹, 福田吉宏, 加藤伸太郎
加藤慶三, 後藤信昭 (沼津市立)
江口正信 (同・病理)
近藤福雄 (船橋中央)

(目的) 動脈性 vascularity の差異に基づいて高分化型肝細胞癌の予後を検討し、予後から見た臨床上的早期肝細胞癌の定義を行った。(対象と方法) 対象は画像所見及び腫瘍生検から単発高分化型肝細胞癌と診断された32例。US angiography の所見から A 群: hypovascular pattern ($n=20$), B 群: vascular spot in hypovascular pattern ($n=7$), C 群: hypervascular pattern ($n=5$) の3群に分類した。背景因子の統計学的分析には t 検定, χ^2 検定を使用し、累積生存率、累積再発率は Kaplan-Meier 法にて算出した。(結果) A 群では、他の2群に比して有意に肝予備能が良好で、腫瘍径が小さかった。A 群の累積生存率は、3年100%、5年100%、10年63.5%と極めて良好で、累積再発率は3年19.5%、5年44.3%、10年72.2%と他の2群に比して有意に低く、当院のウイルス性肝硬変599症例の類性発癌率とほぼ一致する結果であった。再発形式は、A 群では単発再発が多く、他の2群と同様に hypervascular な結節で再発することが殆どであった。(結語) hypovascular な高分化型肝細胞癌における生存率、再発率は他の2群に比して明らかに良好であった。また本群の再発率は肝硬変からの発癌率とほぼ一致したことから、intrahepatic metastasis はないものと考えられ、本群は早期肝細胞癌と呼ぶに相応しい病態と考えられた。

19. 肝細胞癌に対する低侵襲・根治療法としての炭素イオン線治療

平井 太, 加藤博敏, 宮本忠昭
大藤正雄
(放医研・重粒子治療センター)

肝細胞癌に対する炭素イオン線治療を、侵襲度の観点から次の2つの方法により検討し、低侵襲治療であることを明らかにした。

1. 肝および全身状態に対する侵襲度を、それぞれ Pugh スコア, PS (WHO) の治療前後の変化から検討した。
2. 治療開始前から終了直後までの急性期における自覚症状の変化を、5段階評価のアンケート調査を用い

て検討した。

20. 経静脈性超音波造影剤を用いた肝細胞癌治療効果判定

植田吉彦, 安原一彰, 仲野敏彦
巖 俊, 瀬田敏勝, 小山秀彦
長門義宣, 伊藤文憲, 久満董樹
(船橋中央)
近藤福雄 (同・病理)

肝細胞癌の治療評価に関し造影超音波の有用性を明らかにする為、治療後肝細胞癌19結節において、レボピストを用いた造影 Color Harmonic Imaging での所見を Dynamic CT 所見と比較した。装置は、TOSHIBA Power Vision 6000を使用した。造影 Color Harmonic Imaging 所見で、腫瘍部の造影欠損が認められ治療有効と評価したものは14結節、腫瘍一部の領域が濃染され治療不十分または局所再発と評価したものは5結節、ともに Dynamic CT 所見でも一致した結果を示した。造影超音波は、治療評価に有用と考えられた。

21. 肝細胞癌の反復動注化学療法におけるリザーバーを用いたCTAの有用性

瀬座勝志, 遠藤恒宏, 永嶋文尚
(塩谷総合)

77日間の反復動注化学療法中 HCC 患者の経過観察において、リザーバーを用いた肝動脈造影下CT (リザーバーCTA) による治療効果判定を、DynamicCT と比較して検討した。対象は5例で、リザーバーCTA のみで描出される31結節のうち7結節が HCC であることを確認し、DynamicCT とリザーバーCTA の併用は早期に新たな HCC を描出可能とした。またリザーバーCTA は薬在分布を把握できるため、治療効果の予測と、新たな栄養血管の存在とその治療の必要性を判断できると考えられた。

22. 当院における HCC 再発例の検討

山田博之, 日野眞一, 中川彰彦
黒澤俊介, 隆 元英, 五十嵐正彦
(国立習志野)

初発時の診断を当院で行い、1996年1月より、2000年6月までの間に経過を観察された症例は133例あり。そのうち最大腫瘍径3cm、腫瘍数3個以下は59例であった。この59例を治療法別に分類し、初回治療から再発までの期間について、症例の条件などを考慮し検討した。

その結果、腫瘍径、Child 分類などは再発までの期